

五代宋初における南郊儀禮の變化をめぐって

——三年一郊の確立——

久保田 和 男

はじめに

南郊儀禮は、基本的に冬至に、都城の郊外で行われる國家儀禮である。天を祀り、天に臣従することにより、「天子」とよばれる資格を得る儒教王權上の最重要な儀禮といえる。¹

この儀禮は、儒教國家として漢が再編された後漢時代より定例化した。ただし、皇帝が自らまつる親祭は大規模になるため、「有司攝事」の場合が多くなる。例えば、唐代を通じて皇帝親祭で行われたのは三一回だけであり、太宗や玄宗などを除いて、多くの皇帝は一代の間に即位の儀禮として一度であった。² それだけ皇帝親祭は重要かつ大規模な儀禮として實施され、皇帝權力の可視化をはかるものとなった。³

この儀禮は都城の南に設けられた圓丘・天壇で行われる。

佐川英治氏によると、⁵ 圓丘や南郊については、儒教の議論あるいは北族系王朝の習俗などの影響により特に五胡・北朝期に様々な變遷があったが、北魏の洛陽城において、唐の長安にも受け継がれるような南郊儀禮を行うための基本的な都城空間構造が完成したという。宮城の端門・中軸街路・國門・南郊という軸線を中心に東西に廣がる構造である。メインストリートとしての朱雀大街は南郊行路として用いられるため、他の大街の二倍の幅員が與えられている。このような構造は日本の平城京においても受け入れられたが、南郊儀禮を行わない日本の朱雀大路は朝貢のために訪れた外國使節の通路として専ら用いられる。⁶

現在、唐宋代の郊祀については、多方面からの研究が進んでいる。⁷ 私は最近「五代十國」という華北王朝を正統と考える史觀をめぐって、特に十國での郊祀の問題と關連して考え

てみた。⁸⁾「五代十國」時代では、南郊親祭は、唐代後半と同じく、ほぼ一代一郊で行われていたが、宋朝では皇帝一代で數回實施するようになり、やがて、「三年一郊」という頻度が共通認識となる。⁹⁾このような推移の背景にある歴史的状况を考えるのが本稿の目的である。特に、儀禮空間としての都城開封の中軸線街路（御街）の變化や郊祀において發出される敕文の傳達とその内容を考えてみた。このような検討によつて、頻繁に行われるようになった南郊儀禮が宋朝政治においてもつ機能の、これ以前の時代とは異なる特性を抽出してみたい。

一、「五代十國」と郊祀

近代歴史學は、「五代」というこの宋代に生まれた時代名や枠組みを繼承している。そして、唐から宋に至る變革期の過渡的な段階としてこの時代を理解し、その獨自性に注意を拂つてこなかった。それに對して、唐朝の崩壊後、中原國家と地方政權との封建的な結びつきの秩序を明らかにし、それを「五代天下秩序」として、この時代獨特の政治文化として理解したのが、山崎覺士氏の研究である。¹⁰⁾

中原國家が南郊を舉行するときには、南方列國からの貢獻などを用いて禁軍兵士への賜與が大々的に行われる。禁軍掌握は五代中原國家の存亡に關わる問題であつた。したがつて、

山崎氏が言及されていない「南郊儀禮」は、二重の意味で「五代天下秩序」において重要であつたと私は考える。¹¹⁾

ところが後晉は南郊を行っていない。遼に助けられて國家を形成したため、南方列國からの朝貢は呉越を除いて行われなくなる。郊祀を行う計畫はあつたが、恐らく、遼への歳幣などもあり、兵士への賜與などが不足して、南郊儀禮を實施できなかったのである。天から受命されない「天子ではない皇帝」で終わったのである。つづく後漢も郊祀を舉行するまえに禪讓している。とすると、「五代天下秩序」は、後唐以降の後晉・後漢には當てはまらないのではないか。

後唐から後晉への交代劇の一方で、南方では、呉から南唐への交代が行われている。そして、南唐皇帝となつた徐知誥は、李昇と改名し唐の皇統を受け継いだものとして振る舞う。後唐が滅亡したことが、その出發點ともなつていたのである。李昇はかつての建康の地に金陵を、宮城から南正門に至る南北中軸線街路（御街）を持つ都城として建設した。御街の先に天壇を建設して郊祀を實施している。

李昇の南郊儀禮は、「國際的」なものとなつた。遼・後蜀・呉越・荆南・閩などが慶賀の使節を送っている。すなわち、この時點では、中原よりも、江南の南唐に中心性があつたことになる。¹²⁾しかし北宋の「五代十國」史觀（『新五代史』『資治通鑑』など）は潛僞としてのみ扱い輕視する。山崎氏が主張する「五代天下秩序」も、五代を正統と考える宋人の呪縛

から抜け切れていないのではないか。

後周の太祖郭威は即位三年後（廣順三年、九五三）に郊祀を行うことになる。ただし、この郊祀は「天下」からの朝貢が餘り期待できない状態での郊祀であった。したがって兵士への賞與も不足がちであり、不満の聲も上がったほどである。しかも郭威（太祖）は病に伏せており、ほとんどの儀禮は後繼者として指名されていた柴榮（世宗）や有司が代行した。なお、この郊祀は、開封で行われた最初の郊祀である。

この時期の南唐は國力はますます充實し、楚や閩を併合して、最大領土を獲得していた。二代目の皇帝李璟は、九四三年に即位するとともに郊祀を實施しているようだ。このことが、宋代の資料（『南唐書』など）には缺けているが、元代に書かれた『宋史』にだけ、記録されている。

ところで、後周の世宗は、即位直後より精力的に改革を實施している。廢佛を行って銅錢を鑄造し財政を豊かにし、禁軍から老兵を淘汰し強兵のみからなる軍團に再編成した。そのうえで三度の南唐への侵略を行って、製鹽業などで豊かな江北諸州を獲得して、そこからの税收によって國力を充實させる。これまで、不安定な海上交通に頼っていた呉越國からの朝貢が陸路（運河）で開封に至るようになった。南唐（江南）¹³からも進奉使が来るようになった。¹⁴

これは、「五代天下秩序」の回復なのか、それとも新しい秩序の形成なのか考えるべき問題であろう。先に、世宗は顯

徳二年（九五五）夏、文官たちに、「平邊策」立案を求めている。世宗の發言に次のようにある。

朕（世宗）、歴代君臣の治平の道を觀るに、誠に易からずとなす。また念うに、唐、晉失徳の後、亂臣・黠將、僭竊するもの多し。今中原はじめて定まるも、吳・蜀・幽・并はなお未だ平附せず、聲教は未だ能く遠く被わす。よろしく近臣をしておのおの論策つくらしめ、經濟を導くの略をのべしむ。¹⁵

世宗の認識では、後唐・後晉が「失徳」した故に、「吳（南唐）、蜀（後蜀）、幽（燕雲十六州、遼）、并（北漢）」が離反しており、貢獻が失われている、という。世宗に對して多くの論者は「故遠人不服、則修文徳以來之」という『論語』季氏篇にみえる論理をもって答えたという。「修徳」することで、失われた朝貢・冊封體制の復活を求める。しかし、このとき王朴ら四人は、隣接する江淮を攻撃して占領することを提案している。¹⁶ 貢獻がないのであれば、豊かな地域を侵略しその富を用いて、國力・軍事を強化しようという。とくに王朴の「平邊策」には¹⁷ まず江北を得てその民力によって、禁軍への供給を充實し、そのほかの地域を平定するという戰略が具体的に書かれていた。世宗は王朴の策をもちい、三回にわたる南唐への親征を成功させるのである。提案者の王朴は文官のホープ（權知開封府事・樞密使）として冬季に行われた遠征中の留守を預かり、都城開封の整備や、大運河漕運

の復舊工事に活躍している。¹⁸⁾

有徳者による、天からの受命儀禮としての南郊が行われ、それを慕って天下各地の人々が朝貢する。これは儒教的封建國家の理念である。世宗は、「修徳」による封建秩序再建の獻策は採用せず、軍事力の行使による天下統一戦略を採用する。世宗による南郊が行われなかった背景はここにある。

二、北宋太祖の南郊親祭について

王朴が急死したのが九五九年四月である。その年の七月には世宗も早世する。翌年一月に、趙匡胤は、幼帝から禪讓をうけ、宋朝太祖となる。太祖は世宗とは打って變わり、在位十七年の間に、合計四回の南郊親祭を行っている。

a、「五代」の創造

北宋成立當初、これまでの五つの中原王朝と同じように短命で終わる可能性は十分にあった。「三百年王朝」が創始されたと九六〇年に考えた者はいなかったであろう。『長編』には、「陛下新得天下、人心未安、今數輕出、萬一有不虞之變、其可悔乎。」¹⁹⁾とある。即位初年には、中山や揚州の藩鎮が、禪讓に反對して反亂を起こしている。それぞれ、北漢や南唐からの陰からの支援を受けた反亂だったようだ。鎮壓した太祖趙匡胤のもとには、南唐と呉越より、即位や聖誕節を

祝う使節が到着するようになった。²⁰⁾ 兩大國の臣従が確定したことで、「天下」を平定する足がかりができた。建隆三年には、江南（後唐）に宋曆が初めて頒布された。²¹⁾ 趙匡胤も「唐季以來、數十年間、帝王凡そ易わること八姓、戰鬪やまず、生民塗地・・・」と述べ、²²⁾ 短命な王朝交代による亂世を終わらせる「國家長久計」を考える。藩鎮を押さええ君主權の強化と軍事力の集權化を着々と進めることが明確な政策目標となる。

建隆二年（九六一）の秋になると、當時まだ自立していた荆南國の官僚が、「宋、天下を有す。四方の諸侯屈服面内す。凡そ詔書を下すに皆な仁義にあう。・・・」²³⁾と述べており、宋朝が天下を領有したという認識がみられる。確かに宋朝の直接支配する領土は、後周から受け継いだものにすぎない。ただし、荆南・南唐・呉越などの南方列國が朝貢を通じて臣従していた。自立稱帝している三國（北漢・南漢・後蜀）も邊境の小王國である。乾徳元年（九六三）五月に後蜀の宰相が「臣、宋氏の啓運をみるに、漢周に類せず。天、亂の久しきを厭う。海内を一統するは、それここに在るか。」と述べており、蜀主はこれにより朝貢を考えている。²⁴⁾ 宋朝は、「後漢・後周」とは類似しない、「一統海内」の可能性を高く持った王朝であるという認識が廣まっていたのである。もつとも、この段階の宋朝は、封建的な朝貢關係により天下を支配する「中國」であり、後唐時代の「五代天下秩序」の再建ともい

える状況である。

ただし「五代」との違いを強調する動きも登場するものもこの時期である。「五代」が特定の時代を表す名詞として登場してきたのは何時であろうか。恐らくその嚆矢となったのは、乾徳元年（九六三）七月に、監修國史王溥により上呈された『五代會要』の書名からではないかと思われる。⁽²⁵⁾王溥は、二年前（建隆二年（九六一））に『唐會要』を完成させている。すなわち、後梁から後周までの諸王朝を、「五代」として一括して認識し唐の傳統から切り離す。そして、宋朝を「五代」とは別の、唐を繼承する統一王朝として考える歴史観⁽²⁶⁾が生まれたのである。

劉浦江氏は、建隆年間に范質が編纂した『五代通録』が「五代」の初出であるという。⁽²⁷⁾典據とされている『玉海』巻四八・一〇bには「(范質)以五代實録共三百六十卷爲繁、遂總爲一部、命曰『通録』。・・・乾徳五年三月戊申、范旻上先臣所撰『五代通録』」とある。後周の宰相であった范質が五代諸王朝の實録が繁多であるので、節略して六五卷の一部の歴史書に編纂したのである。その名は『通録』であったが、乾徳五年（九六七）に、息子の范旻によって上呈されたとき、「五代」の二字が添えられていたとも讀める。その推測を裏付けるように、『宋史』范質傳には、「(質)又述朱梁至周五代爲『通録』六十五卷、行於世。」⁽²⁸⁾とあり、范質が名付けた書名は『通録』だったのである。恐らく、范質の逝去（乾徳

二年（九六四）の後、乾徳五年に長男の范旻が上呈した時には、時代名としての「五代」が普及していたため、『五代通録』として世に出したのである。

范質や王溥は後周の重臣であったが陳橋の變の後、趙匡胤の宋の建國に協力する。このことが、「五代」を一括した時代とし、宋朝をそこから異質の朝代として捉えさせたのであろう。彼らの政治的選択を正當化するものだった。

乾徳元年（九六三）一月に行われた宋代最初の南郊祭祀においても「五代」との違いを強調する制度論が展開する。

b、唐に倣う郊祀制度

乾徳元年（九六三）二月から三月には、楚の舊地（湖南）において南唐から自立しようとしていた勢力を討伐している。その際、宋軍は荆南の領地を通過したところ、荆南の高繼冲は三州を以て納地することになった。⁽³⁰⁾開封に至った彼は武寧軍節度使（徐州・宿州）を授けられ、開寶六年に病没している。⁽³¹⁾楚の舊地（湖南）に割據していた勢力も宋軍の到來にたちまち逃亡した。⁽³²⁾

このような、宋朝の國勢進展をうけて、その年に行われた南郊親祭は、宋朝初めてのものであった。八月にはこれに先立って準備が開始されている。『長編』には、

郊天之禮、唐制、每歲冬至圜丘、正月上辛祈穀、孟夏雩祀、季秋大享、凡四祭昊天上帝。親祀、則并設皇地祇位、

國朝因之。作壇於國城之南薰門外、每歲令有司奏事於南郊⁽³³⁾。

とある。唐制によって、天地合祭で行われることになり、南郊壇は、國城（外城）の南薰門外に新設された。後周太祖も開封で郊祀親祭を行ったが、後周太祖の開封は宣武軍節度使の會府だった唐朝時代の汴州城（宋の裏城・舊城）の規模である。南正門（薰風門、宋では朱雀門）の外側に郊壇が設けられている。このときの郊壇は、世宗が外城を建設する際に城内に入ってしまったのであろう。南薰門は、外城の正南門であり、その郊外に宋朝の南郊壇が唐制にしたがって改めて建設されたのであろう。

『長編』の記事では、南郊五使（南郊大禮使、禮儀使、鹵簿使、儀仗使、橋道頓遞使）に、唐制に因った人選が行われていることが記され、後梁や後唐・後周とは異なり唐制を用いたことが強調されている。開封尹趙光義は「橋道頓遞使」に任命される。「橋道」の二字が宋代に新たに加えられたという。開封の御街は、大運河（汴河）と蔡河と交差しており、橋（州橋・龍津橋）の安全確保が重要な任務だったからである。南郊では、皇帝とその鹵簿は、宮城の正南門（明德門のちには乾元門・宣德門ともよばれる）を出て、太廟での拜禮を行い、その後、南北中軸線街路（御街）をたどって、朱雀門・南薰門を経て南郊壇に至る。

大禮使の范質（先述した『五代通録』の編者）は他の

五使とともに、準備をすすめたが、参考にする事ができたのは、後唐明宗時代の『南郊鹵簿字説』だけだったという。しかも、これは餘りにも「疎略」であり、「違戾」する部分も多く、彼らは新たに『南郊行禮圖』を定めたという。一〇年前に、後周太祖が、南郊親祭を行っているが、『長編』では「於是、質等相與討尋故事。時官籍散落、舊吏皆物故」しており参照できなかった、というまとめ方がされている。これは、後周の郊祀が参照できない状況にあったことを表している。恐らく范質や太祖や太宗らは、後周の郊祀に主だった役割で参加しているはずなのである。参照されなかった理由は資料によってはわからないが、「五代」は亂世であり、倣うに値する制度はないという宋朝の基本姿勢がここに現れているのではないだろうか。五代の亂世を太平の世にする宋朝なのである。例えば、後周の世宗の曆（王朴作成の「欽天曆」）が早くも天文に合わなくなってしまったとされ、太祖が序文を書いた「應天曆」が頒行されている⁽³⁶⁾。

さて、この郊祀の際には、呉越と南唐が、多額の助祭錢を貢納している。呉越は、王族を郊祀に参加させている。この年の二月に納地した高繼沖は一族を擧げて、開封に至り、一月の南郊に参加する。その際に「郊祀銀」萬兩を献上している⁽³⁹⁾。これは後周の世宗の時には採用されなかった、「故遠人不服、則修文德以來之。既來之則安之。」という儒教的な「平邊策」の實現ともいえよう。ところで、太祖は一七年の

治世のなかで、四度の南郊親祭を行う。太祖一代において複数回の郊祀が行われる事態はどうして生じたのだろうか。

c、不定期の南郊（太祖）

太祖の四度の南郊は、後の三年一郊とは違い、実施時期は不定期である。乾徳元年（九六三）の郊祀は、荆南と湖南を宋の版圖に組み入れた段階で行われている。つづいて、後蜀を併合し（乾徳三年（九六五）、西南夷を服従（九六六）させた後、乾徳六年（九六八）一月に南郊親祭を行い大赦・改元（開寶元年）とする。郊祀の実施を告げる詔勅には、

さきに蜀土したがわず、自ら罅隙をひらく。興師して問罪するに及ぶに、にわかに櫛を興ぎてもつて來降す。

既に不陣の功をなすは、じつに天よりの祐をうける。加うるに歳年豊稔にして、黎庶咸安すんじ、三邊、擊柝の虞なく、五緯、連珠の異あるをもつてす。

鴻休をみるごとくのごとし。涼徳を顧るに

をもつて勝らん。宜しく報謝の誠をのぶべし、まさに告成の禮を展ぜん。朕今年十一月二十四日をもつて、こと南郊にあり。

とあり、後蜀を平定したことを「天祐」として天に感謝するための南郊であった。

南漢を平定したのが、開寶四年（九七二）二月のことであるが、同年一月に南郊している。『長編』では、「上既平廣

南、欲行報謝之禮。」とあり、「開寶四年有事南郊詔」には、「聲教既通南夏」とあり、南漢平定を天に報告するものであった。「開寶四年南郊赦天下制」には、

我が國家は上天の景命をうけ、四海の歡心をあわせ、車書大同し、聲教はとおくおおう。ここに自ら五嶺塵清、

南溟浪靜し、萬里の封疆をひらき、兆民の蘇息をいたす。とあり、この赦文によつて、南漢が征服されたこと（塵清五嶺、浪靜南溟）が、領内に伝えられる。大赦は郊祀の度に行われる。太祖時代の郊祀赦文は、宋朝の領土擴大を告げるものだった。赦文は進奏院を通じて藩鎮に傳達され、州縣において庶民の前で宣讀され、里では粉壁に掲示される。大赦は、犯罪者の赦免だけでなく、税金の減免や、借財の取り消しなど、一般庶民の生活にも深い関わりがある。赦文をメディアとして、宋朝の版圖の擴大が「率土」（宋の領域）の隅々にまで傳達されたのである。

更に開寶八年（九七五）一月、江南（舊南唐）を平定する。太祖は、九年の正月辛未、開封で南唐後主李煜と會見する。その四月太祖は、江南を平定したことを、鞏縣の安陵に報告し、さらに西方の洛陽に行幸し、その南郊で「上天」に報告する。この郊祀は、洛陽で行われるなど特別なものであった。洛陽遷都の可能性があったことも指摘されているところである。また、郊祀が領土の擴大と天下統一の過程を宣傳するものであったという見地に立つと、開封ではなく太原に近



図1 北宋建国時（960年）

い洛陽で行ったのは、まだ服従していない、北漢へのアピールであった可能性もあろう。可能性を史料上直接的には明らかにできないが、太祖はこの西京行幸の直後に北漢攻撃を命じていたことを指摘しておきたい。少なくとも、皇帝の鹵簿が、開封から洛陽に移動して、そこで南郊儀禮を行うことは、「率土の混同」を中原一帯に視覚的に印象づけたことであろう。

南郊での祭禮をおえた太祖は西都洛陽の宮城正南門である丹鳳門で大赦を發布している。「開寶九年西京南郊赦天下制」⁴⁸⁾

には、

我が國家は受命開基し、民を化し物を育てる。乾坤の垂佑をにない、文軌の大同をいたす。内なれば朝政は雍熙にして、外なれば武功は震耀たり。西川を克復して五嶺を蕩平するにおよび、聲教は寰瀛をおおい、生靈は富壽を納む。ただ江表のみ、いまだ埃塵あり。しばし六師をうごかし、ついで一境を廓清す。數千里の風霾すでにつき、百萬家の生聚は歸するを知る。それ久しく困

しむの民を蘇らせ、布するに惟新の化をもつてすは、沖人の克父にあらず、皆な上帝の儲休なり。いま首夏の良辰を卜すに、西都の正位につき、その燔燎を備え、潔うに豆籩をもつてし。みずから告謝の誠を申し、もつて恭虔の志をたつす。奠玉の盛儀はすでおわり、普天の慶澤はじめて行われる。宜しく曠蕩の恩をひき、もつて混同の化を表すため、天下に大赦すべし。

とある。先に行われた「西川」(蜀)・「五嶺」(南漢)の平定にまず觸れ、その上で江南が平定された、その成功は「沖人」が「克父」からではなく、「上帝の儲休」によるものであり、それに感謝することが南郊儀禮の目的である、それゆえに天下に大赦する、と告げられている。

以上のように、太祖時代の郊祀は領土拡大を、天や祖先へ報告すると同時に、赦文を通じて天下へ傳達する營みとして

機能していたと考えられる。したがって、領土拡大が段階的に行われた宋太祖時代において、三回にわたって舉行された郊祀は、後に出現する一年三郊という定期的なものではなく、不定期に行われたのである。

三、祝祭化する郊祀と三年一郊の確立

a、領土拡大の停止と郊祀の定期的舉行

よく知られているように、洛陽から開封に戻った太祖は開寶九年（九七六）一〇月に急死し、開封尹光義が、二代目の太宗として即位する（大赦）。一二月になつてから太平興國元年と改元し大赦する。したがって、この年は合計三回の大赦があつたのである。敕文によつて庶民に至るまで、江南平定・太祖崩御・太宗即位・改元を否應なく知らされたはずである。

太宗が最初に南郊を行ったのは、太平興國三年（九七八）一月のことである。この年の五月、呉越國王錢俶は、十三州を献上し、兩浙の地は北宋のものとなる。この前月、漳州泉州に自立していた陳洪進も領土を献上してきている。このような事態を受けての郊祀であるが、友好國の辭官納地であるためか、郊祀の目的として明確にされてはいないようだ。

太平興國四年（九七九）五月、北漢を平定する。太宗はそのまま軍を率いて、燕雲十六州の回復を圖るが、六月には契

丹に大敗する。北漢併合を報告する郊祀は、前回の南郊から三年後の太平興國六年（九八一）一月になつてから舉行される。さらに、三年後の雍熙元年（九八四）一月に南郊が舉行されている。

とすると、北漢併合の直後に南郊を行わなかったのは、契丹戦の大敗という要因が考えられる一方で、三年一郊という原則が芽生えていたからともいえる。たとえば、南郊が行われることになつた雍熙元年（九八四）四月には泰山の父老が端門に至り封禪を求めたという。これは、三年一郊という認識に立つて、南郊があることを察知した父老たちが、それならば泰山封禪を舉行してほしいということで申し出たと推測することが可能である。

『太平御覽』卷五二七、礼儀部、河北教育出版社、二〇〇〇、一六七頁に引くところの『漢舊儀』には、「漢法、三歳一祭天」とある。九八四年に完成したこの書類編纂によつてこのような記事が時人に注目されていた可能性はあるようにおもわれる。

ここで、天下統一の事態をうけての封禪を行うことが一旦は決定している。太宗期の頂点をなす最大の國家儀禮となるはずであった。しかし、決定から一ヶ月後には中止となり、この年は（豫定通り）郊祀を行う。更にその三年後、雍熙四年（九八七）は前年より遼と全面戦争が行われており、科擧の試験も中止されている。戦況は宋軍に不利で、魏州・博州

より北は遼軍の蹂躪にまかされた。そのためか南郊は行われなかったが、翌年の正月（端拱元年（九八八））、東郊にて親祭を実施し先農を祀った（藉田）。ここで改元大赦する。

三年一郊という原則によれば、次の南郊は、九九〇年（淳化元）年の十一月となるが実施せず、この年の正月改元した。前年の六月に彗星が出現し八月に大赦している。また遼への対策が厳しさを増していたことも、郊祀不実施の背景と考えられる。次の南郊は、淳化四年（九九三）正月に実施された。淳化三年（九九二）十一月の冬至での実施が豫定されたが、太宗の次子元僖がその月に急死したため延期されたのである。

淳化四年の三年後、至道二年（九九六）一月に太宗最後の郊祀が行われている。このように、三年一郊という郊祀の間隔は太宗時代にその萌芽が見られるといえよう。ところで、この至道の郊祀は、宋朝における郊祀の推移において大きな転換点となつている可能性がある。遼との交戦が小康状態となつたこの時期、太宗は北伐を断念し、文治主義に舵を切つたと考えられる。『太宗實録』端拱元年（九八八）三月の記事には、「至是上頗有厭兵之意」とある。それに對應して郊祀の在り方が變化していったことは想定可能であろう。領土の拡大は止まり、それを天に「大報」する郊祀ではなくなつたのである。そこで三年一郊というルーティーンで南郊親祭を行うことが可能になる。

b、御街の擴幅と人口の擴大、鹵簿の倍增（至道の郊祀）

眞宗時代、景德元年（一〇〇四）の「澶淵の盟」以降は、遼との共存が國策となる。領土の擴大を誇示し傳達するメディアとしての役割を郊祀は果たすことはなくなつた。代わりに、都城空間の祝祭として側面が目立つてくる。北宋末の開封についての、南宋初期の記憶である『東京夢華錄』では、「上元觀燈」や「金明池爭標」などと並ぶ都城の歳時記中の祝祭（南郊は毎年ではないが）の一つとして、印象的に記述されている。

それらの祝祭は同様に「與民同樂」という言葉に表される宋代の政治文化あるいは都城文化を現出する。それぞれについて詳しく觸れることはしないが、都人が皇帝の徳治によって豊かに暮らすイメージの演出なのである（張擇端『清明上河圖』もそのようなテーマを描いた圖卷である）。『夢華錄』によると、郊祀に先立つこと二ヶ月前、鹵簿の訓練が始まる。特に巨大な象が六頭で鹵簿の先頭を務めたが、その訓練は、都人に郊祀の訪れを實感させるものだったという。象の出現は祥瑞であり、皇帝の徳治を象徴するものだったのである。そのため舞臺空間として宋代開封の特徴として備えられていたのが御街・御廊である。御街は三分されており、真ん中の「中道」が皇帝が中心の鹵簿の中核が進む道であり、その兩側は、護衛兵が詰めた。街路の兩側には、一七〇間の長

さの列柱廊が建設されており、「夢華録」では「御廊」と稱せられている。この御廊は、諸行事を執り行うための公共空間でもあり、郊祀の際には通過する鹵簿を見物する棧敷がもうけられたという。唐長安の朱雀門街では、両側には視線を遮る坊牆がそびえ立っていたが、一方の開封では観衆にあふれかえる御廊が左右に展開していたのである。金元明清の都城では、千歩廊という建造物が設けられるが、その起源が開封の御廊（廊千歩）である。

『夢華録』では御街の幅が「二〇〇歩」（三〇〇メートル）

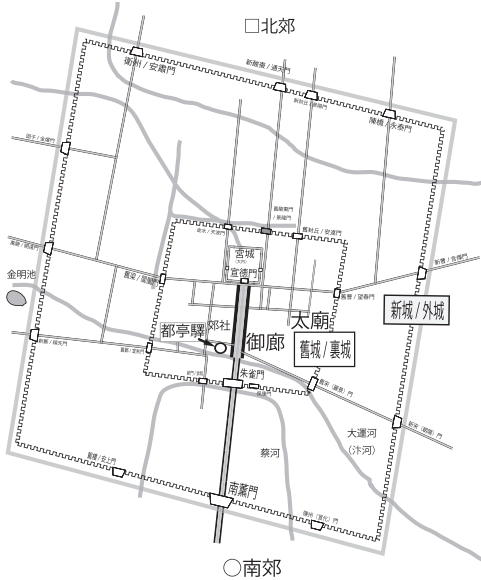


図2 北宋開封図（郊祀関係）

とされている。「常識的には考えにくい」という見解もあるが、まず、これが御廊の幅までも含んだ数字と考えてみたい。開封にならって建造された、遼の中京では、御廊は三間の幅を持つており、柱と柱の間隔は四メートルほどで、片側一五メートルほどであった。開封はこれよりも大きいはずなので、両側で四メートルほどは御廊の分となり、街路自體の幅員は二五〇メートルほどか。唐長安の朱雀門街は、一五〇メートルであった。後述するように、唐代鹵簿を凌駕する人数が動員され複線化した宋代鹵簿が行進する開封の御街の幅員は、長安朱雀門街のそれを上回っていて当然である。

御街・御廊は、太宗時代の後半に整備されている。至道元年（九九五年）正月一日、太宗と李昉が宮城の正門の上から、上元觀燈を楽しむ都人を見ながらの對話である。

上、京城繁盛を觀て、みづから前朝の坊巷省寺の所がいまひろげられ通衢長廊たるを指さし、よりにて曰く「晉の高祖は優柔にして無斷、かかねて奸惡をなす。少主は昏蒙にしてついに亡滅にいたる。漢朝にいたるにその政いよいよ亂れ、蘇逢吉・史弘肇らの輩はたがいに猜貳し、李松の族は枉なるも塗炭におちいる。この時の京城の人情、倉惶にしてほとんど生意なし。あに都邑を營繕するいとまあらんか」と。昉こたえて曰く「晉漢の事、老臣も備な經る。いま陛下は治道に恭勤し聽政に倦むことなし。四海の清晏、輦轂の繁盛を致す」と。上曰く「勤政

憂民は帝王の常事のみ。朕は繁華をもって樂となさず、蓋し民安をもつて安となす」と。⁷⁰⁾

これによれば、「今」「通衢長廊」が五代の官廳群を壊して擴幅されて作られたという。この史料には、上元觀燈の行事に湧く都城民の繁盛を見るというという太宗の行爲が述べられている。五代は亂世であり、現在の京師のように整備できなかった、というのである。すなわち、太宗らにとつてみると「京師繁華」は五代を超越した（宋朝の）正統性の證明なのである。

これより先の淳化四年（九九三）の南郊赦文には、「士民の繁盛をみて、羽衛（キョウヱ）の駢（ならびつらなる）羅を望み、普天とこの大慶を同じくせんと思ふ」とあり、ここでは郊祀の目的とは、（首都開封の）士民の繁盛や、禁軍の鹵簿のならばつらなる様を望むことで、天と大慶を共にすることになっている。先に示したように、御廊は南郊儀禮の際の鹵簿を都人が觀覽するため臨時の棧敷が設けられる場所でもあった。見る側と見られる側の共同作業として、都城繁華が演出されたのである。至道二年（九九六）の赦文にも、

・・・斯爲大報。百神效祉、諸侯駿奔。羅羽衛於康莊、煙霞動色。設宮懸於兩觀、金石成文。千官扈蹕以雲從、萬姓歡呼而雷動。禮終嚴祀、嘉成昭事之心。候屬載揚。廣布惟新之慶。宜覃恩宥。溥洽寰區。可大赦天下。⁷¹⁾

とあるように、鹵簿の行列と、萬民の歡呼に満ちた南郊儀禮

の光景を天下に伝える内容となっている。鹵簿の規模は、唐朝のそれを模倣した太祖時代の一萬人からこの太宗至道二年の郊祀では約二萬人と倍増されている。『宋史』儀衛志には、太宗至道中、有司に令して絹畫をもつて圖をつくらしむ。

圖はおよそ三幅なり。①中幅は車輅・六引および導駕官、②③外の兩幅は儀衛。その④青城を警場すもまた別圖をつくる。圖なりて、もつて祕閣に藏す。およそ仗内は行事官より職掌もて排列す、ならびに捧日、奉宸、散手天武の外、歩騎は一萬九千一百九十八人なり。これ極盛なり。⁷²⁾

とある。鹵簿の倍増は、至道郊祀における變化を表す一つの事例なのである。

さて、この史料によると、鹵簿を圖として以下のように記録したという。

- ①中幅 御街の「中道」を通る「車輅・六引・導駕官」
- ②幅と③幅 兩幅の「儀衛」の圖。
- ④「別圖」青城（天壇にある皇帝が宿泊する施設）の警備狀況。

現在中國國家博物館には「大駕鹵簿圖・中道」と題された圖卷が所藏されている。この圖は、残念ながら、太宗至道中のもではなく、仁宗皇祐五年の鹵簿を描いたものとされている。⁷³⁾「中道」を行進する「車輅・六引・導駕官」などが描かれており、至道の①中幅に當たるものであろう。

とすると、中道とその両側の側道・御廊という『東京夢華録』にみえる御街の構造は、太宗期後半に形成されたものであり、それは、至道郊祀にて倍増された二萬人規模の鹵簿の構造に反映されているのである。

鹵簿に向かつて歡聲をあげる都城の人々（都人）もその人口を増加させていた。太平興國中（九七六―九八四）は、汴河漕運は一年二〇〇萬石だった。⁽²⁶⁾これがやがて、三〇〇萬石（併せて菽^{まめ}一〇〇萬石）となり、至道元年（九九五）九月には、五八〇萬石に増加したという。⁽²⁷⁾これは、南唐（九七六）・呉越（九七八）を併合したことにより江浙の上供米が開封に漕運されるようになったことを反映している。消費物資の増加は、人口の増加に比例する。關運する太宗の下間に答えて開封の都市問題に通曉する張洎が以下のように上奏している。

いま帶甲數十萬、戰騎これにかなうは、京師にあつまる。なお亡國の士民をもつて輦^{しよと}下にあつむ。漢唐の京邑庶民庶にくらべ、その人は十倍なり。・・・ただ汴の水は中國をよこたわる。首に大河をうけ、漕は江湖を引き利は南海をつくす。天下の財賦のなかば、ならびに山澤の百貨は、ことごとくこの路によりてすむ。・・・しばしば墮廢するといえども、流通は百代の下たえず、ついに國家の用たるは、それ上天の意なるかな。⁽²⁸⁾

開封には數十萬の禁軍兵士と、「亡國之士民」が集められ、庶民人口は漢唐に比べて「十倍」となつたと誇張氣味に説明

する（唐の長安の人口は最大で七〇萬人程度⁽²⁹⁾である。一方、太宗時代開封の人口は、一三〇萬程度と推定される。）張洎は、急激な人口増に對應可能な、汴河による漕運の利があつたのは、「上天の意」であると述べている。「天」の意思が實現したのであれば、それを南郊で報告するのが天子たる宋朝皇帝の務めである。天の「休^{さいわい}」によつて達成された京師の繁榮を天に報告し、赦文を通じて天下にも傳達すること、これは領土擴大が止まり對遼戦も劣勢となつた宋朝において、皇帝政治の正當化の演出として用いられるようになったのである。したがつて、それは三年一郊のルーティンで行うことが求められたといえよう。

一方で、都城繁華の演出は「遼」への對抗手段だつたと考えられる。先引の『宋史』の下文には、景祐五年（一〇三八）の賈昌朝上奏が載せられているが、

南郊の大駕鹵簿・儀衛ははなはだおおく、有司は典禮・名物の次第・兵仗の數目によりて、あらかじめ分布し、五使が量行案閱におよぶといえども、それ執掌につかわされる吏員兵伍は、もとより閑習^{しんじゆ}せざるがごとし。行列の先後、多く次序をうしなう。持つところの名物もまたあるいは差互せり。押當官、ただ行事をもつて名と爲し、便に従いて趨進し、その守るところをうしなう。ひそかにおもひに、三載の親郊は國の大事なり。旁になら

べし象物、仰ぎて乾行にのつとる。四方の人、ここに禮をみる。よろしく制度をあきらかにし、もつて光華を示すべし。

とあるように、「四方之人」に、宋朝の「光華」を見せることが「三載の親郊」の役割であることが示されている。

澶淵の盟からは、開封には遼使が毎年二度来訪し滞在した。開封の景観は草原に傳えられたと考えられる。彼らは御街西側の都亭驛に宿泊し、宮城へ向かう際は、特例として中道を通ることが許されたという。遼が一〇〇七年に建設した中都大定府には、中軸線街路に「通衢長廊」をもつ開封のプランが採り入れられているのである。⁽⁸³⁾ 遼の都城建設に影響を及ぼしたということは宋朝の「文化戦略」は成功したといえるのではないか。

眞宗時代の澶淵の盟は、宋遼の不安定な關係を調整したものであるが、やはり宋からすると屈辱的な盟約である。それを糊塗するために眞宗がとつた方法は、天書の降下をはじめとする道教による國家統合であり、太宗がなしえなかつた封禪や汾陰祀などの國家儀禮の舉行である。開封宮城の宣徳門東南に、聖祖趙玄朗以下の宋朝皇帝の神御を祀る道觀「景靈宮」が建設され、郊祀において祭禮を行う地點に加えられた。この制度は、南宋にも受け継がれていった（太廟の神主とともに景靈宮の神御は杭州に運ばれ、郊祀の復活に利用される⁽⁸⁴⁾）。中國の民族宗教という位置づけも可能な道教の重視

と都城繁盛の演出という新しい郊祀の要素は、平時における遼（佛教主義⁽⁸⁵⁾）への對抗關係として宋朝が取り入れたものである。

おわりに

梅原郁氏（梅原一九八六）は、唐宋變革という枠組みの中で、宋都開封における南郊儀禮を分析する。そして、唐代までのそれが皇帝と支配者階級の祭りであつたが、宋代には総合的な皇帝を核とした「國都の定期的なページェット」へ變化したという見方を提示している。本稿は、氏の卓見をふまえて、宋代の郊祀がなぜそのような特徴を持つようになったのか、時代背景や都城空間の特徴を提示して検討してきた。

唐後半から五代十國においては南郊儀禮（親祭）は、ほぼ一代一郊で行われていた。すなわち、即位を天に報告することが目的だった。多くの國からの朝貢・進奉を受けていた後唐は、諸國の貢獻を利用して、南郊儀禮を舉行し、その資金の多くは、兵士への郊賞として用いられた。しかし、後晉や後漢・後周では朝貢關係をもっていた國が少なく、南郊儀禮を行うことができたのは後周の太祖だけであつた。

宋朝になると一人の皇帝がその治世の間に頻繁に南郊儀禮を行つている。太祖は四回の南郊親祭を行つている。それは、段階的に成就した領土擴大を天の恩恵として天に感謝し、禁

軍兵士に郊賞を行うものだった。したがって、その間隔はまちまちであった。また、南郊の最後に行われる「大赦」によって天下の人々に領土擴大を傳達し、宋朝政府が「五代」として認定した、唐宋から宋の間の五三年間の期間に興亡した諸王朝とは違う本格的な王朝であることを示すことができた。その制度は、唐朝の制度を繼承したものととして演出された。これも「五代」を超克したことを示すことだった。

ところが、太宗の後半期、遼との戦いに敗北し領土擴大は停止する。ここで、南郊において、天や天下に傳達する内容は變化せざるをえない。本稿の検討によって、その轉換點は太宗の治世が終わりに近づく、至道元年（九九五）の前後ということが判明した。これ以降の南郊儀禮は、「都城の繁華」に象徴される経済的な發展を、天に對して報告し感謝するものに變化している。増加した都人の、盛大な歡呼に應えながら、擴幅された御街を、これまでの二倍の人数に擴大された鹵簿を率いて皇帝が南郊に行幸して天に謝意を述べる。さらに、ここで示された宋朝の繁榮を大赦を通じて天下に示す。

宋初、開封の人口構成の多くを占めるのは禁軍軍人とその家族だった。彼らを厚遇により懐柔することが宋朝軍政の基本である。⁸⁶ 宋朝が郊祀を定期的に行い、禁軍への賜與を厚く行うのは、禁軍兵士を管理する面から重要な統治行爲となった。太宗時代には禁軍数が倍増している。すなわち、開封の人口も大幅に増加する。それは「京師繁盛」という面で唐を

こえた朝代であるという認識を導き出す。呉越・後唐の二大國家を併合し、朝貢ではなく上供という形で、物資が汴河を通じて開封に漕運される。その數量も倍増し、増加した消費をささえた。

宋初においては、「五代」の亂世を超克した「唐朝の後繼王朝」という同時代認識を持つとしていた宋人たちも、太宗末年頃になると、(唐宋變革と現代では指摘されている) すぐれた政治文化と經濟體制をもった「われらが宋代」(小島一九九九)一八〇頁)という同時代認識を抱き始めていた。目の前には、唐の長安に比べても繁華にみえる東京開封府が現出していた。太宗は、上元節に湧く都城空開を見つめながら、「國家、五代干戈の後に乘ず。朕は孜孜として理をもとめ、惟うに上天の垂祐をのぞむのみ、これ生民の福ならん。いま天下の阜安、京師の繁盛、甚だ以って慰めとなる」⁸⁷と述べている。この「上天垂祐」のため繁榮している都城空開で行われる南郊儀禮は、上元觀燈、金明地爭標などの祝祭とならぶ、都市歲時記の重要な要素として後世に記憶されるようになる(『東京夢華錄』)。

小島氏によると、思想史の上での唐を模倣しようという心情との決別は、孫奭(九六二―一〇三三)が眞宗時代に封禪や汾陰祭祀に對して反對したことから始まるという。⁸⁸ それは、ちようど唐の模倣から始まった南郊祭祀が、三年一郊を遵守する定期的な行事となったことと重なる。また、都城開封の

人口が唐長安を遙かに凌駕し、御街・御廊の空間が形成され、獨自の都城空間の國家的祝祭として確立する時期に重なるのである。

三年一郊で大赦を行うことで、基層社會に至るまで皇帝の存在と帝國の繁榮を定期的に傳達された。また、遼使に對する國勢のアピールとしても有効的だった。宋代の郊祀が國家財政が苦しい中でも巨費を投じて行われていたことについては、趙翼『二十二史劄記』がつとに指摘するところである。⁸⁸⁾その中でも特に、禁軍への郊賞が多くを占めるものだった。

このように、宋朝の郊祀は、宋朝の中央集權的な政治・軍事體制という歴史的な特色を背景とするものとして了解することが可能なのである。儒教儀禮の王權論としての天を祀る儀禮行為だけの存在ではなく、宋朝政治文化の根本に關わるような行事だったといえる。したがって、南宋に至るまで三年一郊という定式化したスタイルで繼續されていたのである。

そのほかにも、重要な検討課題が郊祀についてはまだ依然として殘されている。主なものをあげると、官員に對して南郊の時に行われる恩陰、また、のちに明堂祀が南郊儀禮と交互開催となったこと。また『周禮』による新法改革が行われると、郊祀制度にも見直しが行われる。特に、それ以前は天と地を冬至に合祭していたが、新法黨は分祭を主張した。南宋では再び合祭に戻ったことなどを論じることで、南宋國家

について論じる新しい可能性があるように思われる。

(參考文獻)

- 梅原郁 一九八六「皇帝・祭祀・國都」中村賢二郎編『歴史の中の都市』ミネルヴァ書房
- 金子修一 二〇〇六『中國古代皇帝祭祀の研究』岩波書店
- 久保田和男 二〇〇七a『宋代開封の研究』汲古書院
- 久保田和男 二〇〇七b『宋代の畋獵をめぐって―文治政治確立の一側面』『古代東アジアの社會と文化』汲古書院
- 久保田和男 二〇一一「宋朝における地方への赦書の傳達について」『史滴』第三三號
- 『東方學』第二三三輯
- 久保田和男 二〇一八「五代・北宋における都城洛陽の退場―中國都城史の轉換點に寄せて」『東洋史研究』第七六卷 第四號
- 久保田和男 二〇一九「五代十國」と南郊儀禮」『東方學』第一三七輯
- 小島毅 一九八九「郊祀制度の變遷」『東洋文化研究所紀要』一〇八冊
- 小島毅 一九九九『宋學の形成と展開』創文社
- 佐川英治 二〇一六『中國古代都城の設計と思想 圓丘祭祀の歴史的展開』勉誠出版

佐川英治 二〇一八「唐長安城の朱雀大街と日本平城京の朱雀大路―都城の中軸街路に見る日唐政治文化の差異―」

『唐代史研究』第二二號

妹尾達彦 一九九二「唐長安城の儀禮空間」『東洋文化』七二號

二號

妹尾達彦 一九九五「唐長安人口論」『中國古代の國家と民衆』汲古書院

衆』汲古書院

妹尾達彦 一九九八「帝國の宇宙論 ※中華帝國の祭天儀禮」

『王權のコスモロジー』〔比較歴史學大系一〕 弘文堂

野田有紀子 一九九八「日本古代の鹵簿と儀式」『史學雜誌』

第一〇七編第八號

藤原崇人 二〇一五「契丹佛敎史の研究」法藏館

桃崎有一郎 二〇一六「平安京はいらなかった」吉川弘文館

山内弘一 一九八一「北宋の國家と玉皇―新禮恭謝天地を中心にして」『東方學』六二輯

を中心に」『東方學』六二輯

山内弘一 一九八三「北宋時代の郊祀」『史學雜誌』第九二編第一號

編第一號

山崎覺士 二〇一〇「中國五代國家論」思文閣出版

渡邊義浩 二〇一〇「儒敎と中国」講談社

(中國語)

陳飛飛 二〇一七「唐宋郊賚研究」『乾陵文化研究』第十

一輯

陳鵬程 一九九六「舊題《大駕鹵簿圖書・中道》研究―

延祐鹵簿」年代考』《故宮博物院院刊》一九九六年〇二期

耿元嫻 二〇〇四「任爽編『五代典制考』中華書局 第一章

五代禮儀制度考

江雲 二〇一五「對北宋郊祀費用的探討」『唐山師範學院

學報』第三七卷 第四期

劉浦江 二〇〇五「正統論下的五代史觀」『唐研究』第一

卷

王美華 二〇〇四「任爽編『十國典制考』中華書局 第一章

十國禮儀制度考

楊高凡 二〇一「宋代祭天禮中三歲一親郊制探析」求是學

刊 第三八卷第六期

楊倩描 一九八八「宋代郊祀制度初探」『世界宗教研究』四

七五—八一

朱溢 二〇〇九「唐至北宋時期的大祀、中祀和小祀」『清

華學報』新三九卷第二期

朱溢 二〇一〇「唐至北宋時期的皇帝親郊」『國立政治大

學歷史學報』第三四期

注

(1) 天地的分祭や、南郊と円丘の問題などの議論については、(渡邊

二〇一〇)一九〇—七頁を参照。

(2) (梅原 一九八六)二八七頁を参照。

(3) 『朱溢二〇一〇』三九頁。

(4) 『佐川二〇一六』は古代から隋の大興城にいたる都城空間變化を一貫して郊祀の變遷から論じている。

(5) 『佐川二〇一八』による。

(6) 『桃崎二〇一六』を参照。

(7) 『小島一九八九』小島毅氏は、思想史の立場から、通時的に禮制の變遷として捉え重厚な議論を展開している。唐代以前の南郊については、『金子二〇〇六』が文獻史學の方法によって實證的に論じていて參考になる。宋代の國家儀禮としての南郊については、『山内一九八三』がその合祀される神々の變化に焦點を當てて論究している。『梅原一九八六』は、南郊儀禮と國都住民との關係性の變化を唐宋變革の一環として論じる。『朱溢二〇〇九』は、禮制の視點から唐宋の間の郊祀制度の變化について詳細に検討する。

(8) 『久保田二〇一九』

(9) 『續資治通鑑長編』(以下『長編』と略稱)卷四八一、元祐八年二月壬申、中華書局一九九五、一一四五四頁には蘇軾の上奏を載せるが其の中には、「太祖皇帝受天眷命、肇造宋室。建隆初郊、先饗宗廟、立、祀天地。自眞宗以來、三歲一郊、必先有事景靈、徧饗太廟、乃祀天地。此國朝之禮也。」とある。三年一郊は、眞宗時代から始まったという認識である。

小島氏は、仁宗景祐二年(一〇三五)以降に、三年一郊が定例化したと論じるが、そこには検討すべき點があるという(『小島一九九九』三三頁。楊高凡氏は、仁宗明道二年(一〇三三)からとする(『楊高凡二〇一〇』一四三頁。楊氏の論考は、この問題についての專論であるが、本稿は楊氏が論じていない敍文の内容や、鹵簿や都城の問題そして五代を巡る歴史觀などを関連付けて論じてみたい。

(10) 『山崎二〇一〇』

(11) 『久保田二〇一九』

(12) 『劉浦江二〇〇五』八八―九頁には、五代を正統とする歴史觀に反對する、後唐から南唐に受け継がれた唐の正朔を認定する元人の著作が紹介されており、注目される。

(13) 敗北した南唐は、「歲貢土物數十萬を約束して臣從する。これ以降、上表のとき「唐國主」と稱し、後周からは「江南國主」と詔書では問いかけることになった(『宋史』卷四七八、李景傳、一三八五頁)。北宋が、南漢を征服した九七一年になると、上表にも「江南國主」を用い、「唐國印」を「江南國印」とし、唐の國號を去った(『宋史』卷四七八、李煜傳、一三八五頁)。

(14) 『薛居正・『舊五代史』卷一一八、周世宗紀、顯德五年九月壬申、中華書局一九七六、一五七五頁など。

(15) 『宋史』卷二六九、陶穀傳、中華書局九二二七頁・朕(世宗)觀歷代君臣治平之道、誠爲不易。又念唐、晉失德之後、亂臣黠將、僭竊者多。今中原甫定、吳・蜀・幽・并尚未平附、聲教未能遠被。宜令近臣各爲論策、宣導經濟之略。

(16) 『宋史』卷二六九、陶穀傳、九二二七頁には、「其策率以修文德、來遠人爲意、惟殺與寶儀・楊昭儉・王朴以封疆密邇江・淮、當用師取之。世宗自克高平、常訓兵講武、思混一天下。及覽其策、忻然聽納、由是平南之意益堅矣。」とある。

(17) 『舊五代史』卷二二八、王朴傳、一六七九―八一頁。

(18) 『久保田二〇一八』一四六頁以下を参照。

(19) 『長編』卷一、建隆元年是年、三〇頁。

(20) 『長編』卷一、建隆元年三月丁巳、一〇頁。『宋史』卷四七八、南唐李氏世家、一三八五頁を参照。一三八五頁には「吉凶大禮、皆別修貢助。」

(21) 『長編』卷二、建隆三年一月壬午、七六頁。

- (22) 『長編』卷二、建隆二年七月庚午、四九頁。
- (23) 『長編』卷二、建隆二年九月甲子、五三頁。
- (24) 『長編』卷四、乾德元年五月丁丑、九二頁。
- (25) 『長編』卷四、乾德元年七月甲寅、九七頁。監修國史王溥が「新修梁・後唐・晉・漢・周五代會要三十卷」を上している。
- (26) 『小島一九九九』一七二三頁によると、宋初(太宗・眞宗)時代の文化事業や徳運の議論を通じて、唐の文化的秩序を再建することが宋代人に意識されていたことがわかるという。『宋太宗實録』卷二九、太平興國九年四月甲辰、甘肅人民出版社二〇〇五・三九頁は、「皇家當越五代、而上承唐統爲金徳」という布衣趙垂慶の上書を掲載している。
- (27) 『劉浦江二〇〇五』七六頁。
- (28) 上海書店、江蘇古籍出版社一九九〇年、影印本。
- (29) 『宋史』卷二四九、范質傳、八七九六頁。
- (30) 『長編』卷四、乾德元年二月壬辰、八五頁。
- (31) 『十國春秋』卷一〇一、荆南世家、中華書局一九八三、一四五三頁。
- (32) 『長編』卷四、乾德元年三月壬戌、八六頁。
- (33) 『長編』卷四、乾德元年八月庚辰、一〇一頁。
- (34) 『長編』卷四、乾德元年八月癸未、一〇二頁。司徒兼侍中范質爲南郊大禮使、翰林學士承旨禮部尚書陶穀爲禮儀使、吏部尚書張昭爲鹵簿使、御史中丞劉溫叟爲儀仗使、皇弟開封尹光義爲橋道頓遞使。南郊五使、唐自元和以前史籍不載、長慶後禮儀使、太常卿爲之。大禮使、御史中丞爲之。哀帝時中丞爲儀仗使、而不載大禮使。梁以河南尹、爲大禮使。餘二使如故。又有儀仗法物。二使以武將爲之。後唐以宰相爲大禮使、兵部尚書爲禮儀使、御史中丞爲儀仗使、兵部侍郎爲鹵簿使。開封尹爲頓遞使。周唯以禮儀、歸太常。餘如故。今依唐制、大禮・儀仗・頓遞用宰相及臺丞京尹。餘使則以學士及他尚書爲之、而頓遞使又增橋道之名。
- (35) 『長編』卷四、乾德元年一月甲子、一〇八頁。
- (36) 『長編』卷四、乾德元年四月辛卯、八九頁。改曆は後周の英主世宗とその知惠袋王朴(二人とも早世している)の記憶を薄れさせる效果を狙ったものかもしれない。應天曆の作者は、生前の王朴に曆の不具合をすでに指摘していたというエピソードも『長編』は傳える。
- (37) 吳越については『長編』卷四、乾德元年一〇月丁未、一〇七頁、南唐の助祭錢については『長編』卷四、乾德元年一二月丙寅、一〇九頁を參照。
- (38) 『長編』卷四、乾德元年一〇月丁未、一〇七頁。吳越王俶遣其子惟濬入貢、助南郊。
- (39) 『長編』卷四、乾德元年二月癸未、一一〇頁。
- (40) 『宋大詔令集』卷二一八、中華書局一九六二、四〇〇頁。向以蜀土不貢、自開釁隙。泊興師而問罪、俄輿櫬以來降。既成不陣之功、實荷自天之祐。加以歲年豐稔、黎庶咸安。三邊無擊柝之虞、五緯有連珠之異、睹鴻林之若此。顧涼徳以何勝。宜伸報謝之誠、適展告成之禮。朕以今年十一月二十四日。有事南郊。
- (41) 『長編』卷二二、開寶四年七月甲午、二六七頁。
- (42) 『宋大詔令集』卷一一八、四〇〇頁。『開寶四年有事南郊詔』
- (43) 『宋大詔令集』卷一一九、四〇七頁。門下。我國家膺上天之景命、治四海之歡心、車書大同、聲教遐被。爰自塵清五嶺、浪靜南溟、開萬里之封疆、致兆民之蘇息。
- (44) 『久保田二〇一一』
- (45) 范仲淹「答手詔條陳十事」『范文正公政府奏議』上(『范仲淹研究資料彙編』五二二頁に「・・・國家三年一郊、天子齋戒袞冕、謁見宗廟、乃祀上帝。大禮既成、還御端門、肆赦天下。・・・今大赦每降、天下歡呼。一兩月間、錢穀司存督責如舊、桎梏老幼、

籍没家産、至于寬賦歛、減徭役、存恤孤寡、振舉滯淹之事、未嘗施行。使天子及民之意、盡成空言。……每遇南郊赦後、精選臣僚、往諸路安撫察官吏能否、求百姓疾苦、使赦書中及民之事、一一施行。天下百姓、莫不幸甚。」とあるように、南郊大赦は「百姓」の生活に深く關わるものだった。『宋太宗實錄』卷七六、至道二年正月辛亥（一五五頁）に載せる赦文では、具體的にどのような減稅策が行われているかが記録されている。

(46) 太平興國二年（九七七）には、藩鎮の支郡が廢止されている。

赦文も直接的に州を旨指して遷送された。『長編』卷一八、太平興國二年八月戊辰、四二二頁。

(47) 『宋大詔令集』卷一一八、四〇〇頁「開寶九年有事南郊詔」には、「定鼎洛邑、我之西都、燔柴秦壇、國之大事。沉削平江表、底定南方。惟率土之混同、自上天之降祐、內慙涼德、感是洪休、得不罄以恭虔。申其告謝。……」とある。

(48) 『長編』卷一七、開寶九年八月丁未、三七四頁。

(49) 『宋大詔令集』卷一一九、四〇七頁・門下。我國家受命開基、化民育物。荷乾坤之垂佑、致文軌之大同。內則朝政雍熙、外則武功震耀。洎西川克復、五嶺蕩平、被聲教于寰瀛、納生靈於富壽。唯有江表、未息埃塵。暫勞動於六師、尋廓清於一境。數千里風靈既殄、百萬家生聚知歸。蘇其久困之民、布以惟新之化。非沖人之克父、皆上帝之儲休。今者卜苜夏之良辰。就西都之正位、備其燔燎、潔以豆籩。躬申告謝之誠、用達恭虔之志。奠玉之盛儀既畢、普天之慶澤方行。宜覃曠蕩之恩、用表混同之化、可大赦天下。

(50) 『宋大詔令集』卷一、「太宗即位赦天下制」（開寶九年一〇月乙卯）一頁。

(51) 『宋大詔令集』卷一、「改太平興國元年赦天下見禁例」（開寶九年二月）五頁。

(52) 『宋大詔令集』卷一一八、「太平興國三年有事南郊詔（八月癸丑）」

四〇一頁には、「王者昭事天地、嚴配祖宗、被袞冕以升秦壇、薦牲牢而饗上帝、國之大事。禮有舊章。朕以眇躬、嗣守洪業。載懼寒暑、混一車書。五稼屢登、四郊不聳。蓋昊穹之儲祉、豈涼薄之能然。……」とあるが、下線部に、天下統一の意味が含まれている。

(53) 『宋大詔令集』卷一一八、「太平興國六年有事南郊詔（九月乙卯）」四〇一頁には、「朕、祇膺眷命、克荷天休。頃以參墟不朝、戎輅薄伐。賴穹昊之助順、才刻漏以時。平汾晉之邦、千里而廣。輿賦聿歸於天府、土疆咸復於地圖。……不伸大報之典、曷展益恭之誠。朕以今年十一月冬、至親享太廟、有事於南郊。」とあり、この南郊は、北漢平定を報告するための「大報の典」であった。

(54) 『長編』卷二五、雍熙元年四月乙酉、五七六頁。

(55) 『長編』卷二五、雍熙元年四月甲午、五七六頁「詔以今年十一月有事於泰山」。

(56) 『長編』卷二七、雍熙三年正月、六〇二頁、北伐が開始されている。（久保田二〇七b）

(57) 『長編』卷二七、雍熙三年三月是月、六一〇頁。

(58) 『長編』卷二八、雍熙四年正月、六三一頁。

(59) 『長編』卷二九、端拱元年正月乙亥、六四六頁。『宋太宗實錄』卷四三、雍熙五年（端拱元年）正月乙亥の條一二三頁では、元和五年（八一〇）より行われていなかった勸農の行事の復興であるとする。

(60) 『長編』卷三一、淳化元年正月戊寅、六九七頁。

(61) 『長編』卷三〇、端拱二年六月戊子、六八二頁。

(62) 『長編』卷三三、淳化三年一月己亥、七四〇頁。

(63) 淳化年間になると契丹の侵攻はやんできた。（久保田二〇七b）四九四頁。

(64) （久保田二〇七b）四九五頁など。

(65) 『宋太宗實錄』 卷四四、端拱元年三月癸巳、一三五頁。

(66) 『東京夢華錄』 卷一〇、「冬至」以下、『世界書局』一九七三、二四二頁。

(67) 『東京夢華錄』 卷一〇、「大禮豫教車象」二四二頁。

(68) 『長編』 卷九、開寶元年三月乙巳、二〇二頁によると、馴象が京師に至り、群臣は表賀したという。「象」は「祥」と同音であることから、瑞祥と考えられたのであろう。

(69) 范成大『攬轡錄』、『范成大筆記六種』中華書局二〇〇二、一三頁。

(70) 『范太史集』 卷二七、四庫全書…上觀京城繁盛、親指前朝坊巷舊寺之所今拓爲通衢長廊、因曰、晉高祖優柔無斷、稔成奸惡。少主昏蒙卒亡滅。泊至漢朝其政愈亂、致蘇逢吉史弘肇輩互相猜貳、李松之族枉松塗炭。是時京城人情、倉惶殆無生意。豈暇營繕都邑乎。防對曰、晉漢之事、老臣備經。今陛下恭勤治道聽政無倦。是致四海清晏、輦轂繁盛。上曰、勤政憂民帝王常事耳。朕不以繁華爲樂、蓋以民安爲安。

(71) 『宋朝事實』 卷四、臺灣商務印書館一九六八、五七頁「淳化四年正月二日南郊赦文」には、「…是用就上宰之良日。薦大報之至誠。乾坤既錫於鴻休。祖考是崇於嚴配。八蠻景附。咸伸助祭之儀。百辟靈從。盡展陪饗之禮。諸士民之繁盛、望羽衛之駢羅。思與普天同茲大慶。」とある。

(72) 『宋大詔令集』 卷一一〇、四〇九頁。

(73) 『宋史』 卷一四五、儀衛志、國初鹵簿、三四〇〇頁…凡馬步儀仗、共一萬一千二百二十二人。…唐朝の鹵簿については、(野田一九九八) 四三頁によると、一万人以上の兵士が動員されたようだが、「梅原一九八六」三〇四頁によると、宋代のように重層化しておらず、むしろ一列に近い鹵簿であったという。

(74) 『宋史』 卷一四五、儀衛志、國初鹵簿、三四〇一頁…太宗至道中、

令有司以絹畫爲圖、圖凡三幅。中幅車輅・六引及導駕官、外兩幅儀衛。其警場青城、又別爲圖、圖成、以藏祕閣。凡仗內自行事宜。排列職掌并捧日、奉辰、散手天武外、步騎一萬九千一百九十八人。此極盛也。

同頁には、「仁宗即位、儀典多襲前世、宋綏定鹵簿、爲圖記十卷上之、詔以付祕閣。凡大駕、用二萬六十一人。」とある。

(75) 『陳鵬程 一九九六』を参照。陳氏の論文は、從來「延祐鹵簿」と呼ばれ、元代の鹵簿を描いた圖卷と考えられていたこの圖に本格的な檢討を加え、北宋の仁宗時代の鹵簿圖であることを見事に實證している。

(76) 『群書考索』 後集卷五五、書目文獻出版社一九九二年、八一四頁。

(77) 『長編』 卷三八、至道元年九月丁未、八二〇頁。

(78) 張洎は至道元年十一月、京城の坊名を考案し、定制となった。開封の空間整備が進められている様子が伺える。(『長編』 卷三八、至道元年十一月丁卯、八二三頁)「初梁氏建都草創、閭巷皆因舊號。丁卯、詔參知政事張洎、改撰京城內外坊名八十餘。由是、分定布列、始有雅洛之制云。」

(79) 『長編』 卷三八、至道元年九月丁未、八二〇頁…今帶甲數十萬、戰騎稱是、萃於京師、仍以亡國之士民、集於釐下、比漢唐京邑民庶、十倍其人矣。…唯汴之水橫亘中國、首承大河、漕引江湖利盡南海。半天下之財賦、竝山澤之百貨、悉由此路而進。…雖數陸廢、而通流不絕於百代之下、終爲國家之用者、其上天之意乎。

(80) 『妹尾 一九九五』によると、唐長安の人口は最大で、七〇萬程度という。

(81) 「久保田二〇〇七a」一一二頁を参照。

(82) 『宋史』 卷一四五、儀衛志、國初鹵簿、三四〇三頁、景祐五年、賈昌朝言儀衛三事…南郊大駕鹵簿、儀衛甚衆、有司雖依典禮、名

物次第、兵仗數目、預先分布、及五使量行案閱、其如被差執掌吏員兵伍、素不閑習。行列先後、多失次序。所持名物、亦或差互、押當官、但以行事爲名、從便趨進、失其處守。竊謂三載親郊、國之大事。旁陳象物、仰法乾行。四方之人、觀禮於是。宜詳制度以示光華。

(83)〔久保田二〇一七〕

(84) 南郊で祀られる天（郊天上帝）と道教の最高神、昊天玉皇大帝が同一化されたのも宋眞宗時代である。（山内一九八一）

(85)〔藤原二〇一五〕

(86) 後周の太祖が郊祀を行ったとき、明宗のそれに比べ禁軍への郊賞が少ないという噂が広がった。このとき後周太祖は功績を擧げていないのに不満を持つ彼らに激怒している。（資治通鑑）卷二九一、顯德元年正月壬午、九四九九頁。

『長編』卷三四、淳化四年正月辛卯、七四五頁には「・・度支副使謝泌條上郊祀賞給軍士之數。上（太宗）曰、朕愛惜金帛、止備賞賜爾。泌、因曰唐德宗朱泚之亂、後唐莊宗馬射之禍、皆賞軍不豐所致。今陛下、躬御菲薄、賞賜優厚。眞歷代王者之所難也。」とある。

(87) 『宋太宗實録』卷二八、太平興國九年正月乙丑、二七頁の條「國家乘五代干戈之後、朕孜孜求理、惟望上天垂祐、福此生民。今天下阜安、京師繁盛、甚以爲慰。」

(88)〔小島一九九九〕一七四—五頁。

(89)『二十二史劄記』卷二五、世界書局一九八三、三二九頁、「宋郊祀之費」、また〔江雲二〇一五〕〔陳飛飛二〇一七〕などを参照。

（長野工業高等専門學校一般科教授）